

佛心

二〇二三年四月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会



実るほど

頭を垂れる

稲穂かな

皆様も一度は聞いたことのあることわざではないでしょうか。

稲穂が、実るほどその頭を垂れ下げるように、人間も徳が高くなればなるほど謙虚になる、ということです。英語でも “The more you know, the more humble you become” という諺があるようです。

私は、やはり日本語の言い回しの方が好きです。なぜなら、直接的な言葉で、相手に伝えるのではなく、稲穂という自然のもの（特に日本人にとって親しみのある稲穂）を通して、何かを伝えることに趣を感じるからです。

また、実家の隣に田んぼが広がっていたことも、この言い回しが好きな理由かもしれません。

ところで、先月の天候は、荒れている印象がありました。

3月の初旬は、法事の依頼が立て続けに入っていたため、大雪が降ったさいは、駐車場から車を出せるかどうか心配でした。しかし、法事を勤めていると、太陽が顔を出し、とても良い天気になることがありました。

お寺を出ると、家族連れが横の公園で楽しそうに雪で遊んでいました。私も雪遊びをしたかったのですが、法事終わりで疲れており、その日は家へ帰ることにしました。

太陽の光は、道端に残った雪に反射しながら輝いており、とても綺麗なありさまでした。

そんな天候が度々移り変わった先月は、100キロ離れたハミルトンでも葬儀がありました。往生されたご門徒さんは、ハミルトン仏教会の日曜礼拝に、欠かさず参拝されている女性の方でした。

ご高齢であつたけれど、誰よりも早くお寺に来て、法要後の軽食やお茶の準備をしてくれていました。後片付けも、最後まで手伝っており、ときにはお寺を出る最後の一人となることも度々でした。

私が汚れた食器を集めていると、きまって「先生は、座ってゆっくりしておいてください」と気を使ってくれました。でも、私は彼女と一緒に台所でお皿洗いをしながら話すことが好きだったのでした。

食器洗いを一緒にしていく中で、たまに真宗教義について話すこともありましたが、すると、難しいことは良く分からないうちに、顔色しながら「阿弥陀様は、そのままの私を救いとおぼしめることを、何ともありがたく感じます。」と答えるのでした。

日曜礼拝に來られている人は、「Amida Buddha accepts us just as we are」というフレーズをよく耳にしたことがあると思います。それは阿弥陀如来の他力本願のおはたらきを表わしたものです。

私たちは、そのおはたらきを、言葉を通して、頭を使って理解しようとしがちです。しかし、彼女と話している

と、その教えを頭で理解するのではなく、ここで味わっているようでした。

ある日、彼女は「I'm not good Buddhist」と呟いていたことがあります。見返りを求めず、いつも人を助けをしていた彼女の思いやりのある姿は、誰もが認める「Good Buddhist」でした。しかし彼女は、なぜか自分のことをそうではないと言っていました。

もしかしたら、阿弥陀如来の大慈悲に比べて、私たち衆生の優しさなど、たかが知れていると感じられていたのかもしれない。

阿弥陀如来は、無量光・無量寿の仏さまと呼ばれています。光は阿弥陀様の智慧をあらわし、寿は阿弥陀様の慈悲をあらわします。

その仏さまのおはたらきを自分の姿と照らし合わせると、私たちは「自分は良い人で、良い仏教徒です」と声高に言えなくなるものです。

すべては仏さまがご用意されたもので、私たちの仏性も、そのお育てに預かっているからです。

その仏性という種が、如来のおはたらきを通して実れば実ほど、私たち仏

教徒は、胡坐をかくことなく、頭が垂れ、謙虚になっていくのかと思います。

このように考えると、彼女のあの姿は、まさに「実るほど頭を垂れる稲穂かな」でした。

昨年の秋、そんな彼女から、家に招かれたことがあります。自身の葬儀の打ち合わせをするためでした。通常は、遺族と私の間で葬儀の打ち合わせをします。しかし彼女は、家族に心配と負担をかけまいと、娘二人と私を呼んで、死後の準備をしておきたいと打ち明けたのです。

その打ち合わせは、暗くなることなく順調に進みました。それは彼女が、自身の死を受け入れていたからだと思います。医者からは、余命を告げられており、ここまで生きられたことに感謝していると言っておりました。

自分の死を考えることは、大きな不安に煽られます。また、そのことを考えること自体が難しいものです。なぜなら、私たちは、死というものを経験できないからです。

知ることのできる死とは、葬儀など儀礼を通しての他人の死であり、自分自身の死ではありません。

先月の寺報で、エーリツヒ・フロムの書いた本を紹介しました。その本の中で彼は、「未来は不確実性に満ちている。未来に起こる確実なことは一つもない、ただ死だけを除いては。」

(略)死について考えることは、孤立につながり、その孤立は孤独感を生む。そして、その孤独感は大きな不安を生み出す。」と述べていました。

その死の真理を眼前にして、大きな不安に駆られたとき、このころのよりどころとなるのは一体何なのか？

阿弥陀如来は、法蔵菩薩であったとき、私たちを決して一人にしない、という誓願を建てられ成就された仏さまです。その成就された大慈大悲の誓願は、「南無阿弥陀仏」という六字の名号となり、私たちには届いています。

親鸞聖人は、このことをご和讃のなかで

「煩惱にまなこさへられて

摂取の光明みざれども

大悲ものうきことなくて

つねにわが身をてらすなり」

と述べられました。「ものうきことなくて」とは、「倦(あき)ることなく」ということです。私たちは自らの煩惱

に遮られて阿弥陀如来のお救いの光を見ることはできない。それでも仏さまは、大慈悲のところで、ひと時も絶えることなく、私のことを照らしてくださる、という意味です。

親鸞聖人は、阿弥陀如来のおこころを「大悲」と仰ぐ一方、自らを「小慈小悲もなき身」と省みられていました。

これは謙遜ではなく、聖人自身が、さとりを開かれた仏さまのこころと衆生である自分のこころの相違を垣間見たとき、省みざるをえなかったのだと思います。それだけ阿弥陀如来の大慈悲がおおきなものであったかといえます。

その仏さまの光明は、まるで荒れている天候の中でも、残った雪に光が到り届き、それが反射して私の相をどこからでも照らしてくれるようなものです。

そして、その光明に照らされた私たち衆生は、南無阿弥陀仏の名号を通して、仏様の大きな慈悲を受け賜わっています。

大慈大悲のおはたらきのおそだてに遇いながら、さとり道を歩む私たちは、念仏を口からこぼしながら、その頭を下げずにはいられません。

トロント仏教会

駐在開教使 大内祐真



かんぶつえ

灌仏会（花まつり）

日時：2023年4月16日(日曜日) 午前11時

トロント仏教会では来月16日(第三日曜日)の11時より、
灌仏会（花まつり）の法要を勤修します。

灌仏会（かんぶつえ）は、お釈迦さまの誕生を祝う仏教行事です。

花まつり（はなまつり）と呼ばれ、親しまれている法要の一つです。

この他にも 降誕会（ごうたんえ）、

仏生会（ぶっしょうえ）、

龍華会（りゅうげえ）などの別名もあります。



祥月法要のお知らせ

2023年4月2日

2023年5月7日

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に遇い、阿弥陀さまの恩徳に報謝する思いでお勤めする法要です。

日時：2023年4月2日（英語：午前11時から）（日本語：午後1時から）

場所：トロント仏教会

※英語法要のみZoom配信をさせていただきます。

ZOOMでの参拝を希望される方は、その旨を<tbcc@tbcc.on.ca>までお知らせください。寺院事務所からzoom link を送らせていただきます。

故人が祥月でない方もご遠慮なくご参拝下さい。

※五月の祥月法要は、大内開教使の日本出張と重なっているため、ジェフ・ウィルソン先生(午前の英語)、ジョアン・湯浅先生(午後の日本語)が担当させていただきます。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

